

第2回環境フォーラム

勇払原野の新しい環境保全の試み “環境コモンズ”の視点で見直す「苫東」の風土

2010年10月16日(土)13:30～
苫小牧市サンガーデン

1. 開 会

(司 会)

皆様、こんにちは。定刻になりましたので、これより環境フォーラムを始めたいと思います。私、今日、司会を務めさせていただきますNPO法人苫東環境コモンズの理事をしております孫田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日のフォーラムにつきましては、私たちのNPOと財団法人北海道開発協会の共催という形でご案内を差し上げたところでございます。開発協会の中には環境コモンズ研究会という研究会があり、そこで学識経験者と有識者の方々の検討チームを設けていて、当NPOの理論的かつ実践的なアドバイスやご支援を頂いております。

本日のプログラムの他、お話しいただく講師の先生方のスライドの内容などさまざまな資料をお配りしております。プログラムにございますように、本日は、私どもNPOのこれからにとっても、とても大事な視点をご示唆いただけるのではないかとこの方々を講師にお迎えしております。

まず、フォーラムに先立ちまして、環境コモンズ研究会座長を務めていただいております釧路公立大学学長、小磯先生から、主催者を代表してご挨拶を頂き、引き続き小磯先生からは、基調報告もお願いしたいと考えております。

小磯先生、それから講師の先生方のプロフィールにつきましては、プログラムに書いてございますので、そちらをご覧くださいと考えております。では、早速でございますが小磯先生、よろしくお願いいたします。



2. 主催者代表挨拶

3. 基調報告

「苫東環境コモンズの系譜」

研究会座長・釧路公立大学学長 小磯 修二氏



みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました釧路公立大学の小磯でございます。本日は、「“環境コモンズ”の視点で見直す『苫東』の風土」というテーマで、北海道開発協会環境コモンズ研究会、それから地元で活動を始められたNPO法人苫東環境コモンズの共催でこのような形のフォーラムを開催されることになりました。私からは最初に、これまでの経過説明を含めて基調報告をさせていただきます。

これまで苫東環境コモンズという取り組みがどのような形で展開されてきたのかを最初にお話したいと思います。そして、これからこの取り組みがどのような方向を目指していけばいいか、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

2008年度に、北海道開発協会に環境コモンズの研究会が発足しました。私は、その研究会の座長を務めましたが、そこでの議論や検討の中から、「コモンズ」という言葉の意味、その概念はこれからの時代にとっても大切であること、さらにNPOの活動、そして苫東・苫小牧という地域で環境コモンズという取り組みが展開されることの意義をお話しし、後半は、みなさんと一緒にその問題を考える、そういう流れで進めていきたいと思っています。

去年9月に、この会場で「苫東環境コモンズがめざすもの」ということでお話をさせていただきました。そのときにお話を聞かれている方は、お話の内容が少しダブル部分があるかと思います。ただ、この1年間いろんな活動が行われましたので、その後の経過や、さらには環境コモンズ、あるいはコモンズについてその後考えてきたことなどを併せてお話しさせていただこうと思っております。

まず、最初に「苫東環境コモンズ」という言葉が出てきた背景についてお話しします。

これが苫小牧にある、苫東という大規模な工業基地です。昔は、「大規模工業基地」といわれていました。この計画ができたのは、1970年代の初めです。大規模工業基地の開発計画というのが策定されたのが1971年。72年に、苫小牧東部開発株式会社という、推進のための主体会社ことができました。この工業基地開発計画では、1万ヘクタールを超す工業団地の中に30%を超す緑地が計画されています。世界的にも、工業開発の用地に30%もの緑地があるという例はそれまでありませんでした。

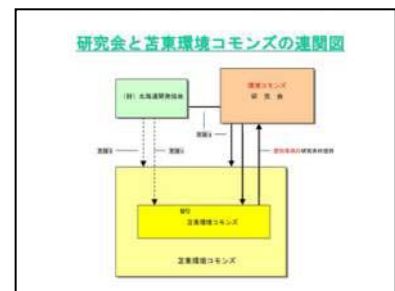


私は今、大学の研究者ですが、以前は北海道開発庁というところで行政の仕事をしていました。この苫小牧の工業基地開発についても、私が社会人になって行政にかかわったとき、すでにプランはできており、当時は環境問題への対応が大きな課題になっていました。日本で初めて環境アセスメントを取り入れたのも苫小牧の工業基地開発事業ですから、環境とどう向き合うかというのは、実はこの工業基地開発の初期の大きなテーマだったわけです。

その後、いろんな曲折がありました。この会社ができ27年後の98年、「苫東の破綻」といわれていますけれども、基本的には経営していた会社が清算されて、新しい会社になりました。その中で

この広い緑地を、改めてどう活かしていくのかというのが、苫東環境コモンズという議論が提起されてきている背景にあります。苫東開発そのものは破綻といわれていますが、これは推進していく主体の会社の形態が変わったということで、“空間”そのものは変わらないわけです。だから、苫東の空間を次の世代にどのようにつないでいくかというのは、苫小牧地域の方だけではなくて、北海道民あるいは日本国民にとっても変わらない大事なテーマです。そこで、1万ヘクタールを超す苫東のその空間に着目してみますと、いろんな特徴があります。普通の土地には農地の規制とか都市的利用規制とか、いろんな規制がありますが、苫東は土地利用規制が非常に少ない自由度の多い空間であるという特徴があります。しかも、3割以上の緑地があり、そこに緑地空間の活用をうまく入れ込むことによって、苫東という空間の新しい魅力が出てくるのではないかと。それによって、苫東という地域が北海道にとって経済的な意味でも環境的な意味でも創造的な価値を生み出す新しい仕組みにつながっていくのではないかと。そういう意義があると私は思っております。

「環境コモンズ研究会」の検討経緯ということで、これまでの流れを簡単にご紹介したいと思います。2008年度に北海道開発協会で「環境コモンズ研究会」という取り組みがスタートしました。学識者の方や、今日の講師の「ねおす」の宮本さんにもメンバーに入ってくださいました。開発協会開発調査総合研究所の草薙さんはもともと苫東におられて、緑地の専門家です。現在はたまたま開発協会におられますが、地元で実践しておられる活動を発展させて「NPO苫東環境コモンズ」を作り上げていこうという担い手でもあり、この研究会の趣旨は、草薙さんの活動をバックアップしていこうという位置付けもあったと思います。この地域では、すでに20年以上前から「森林愛護組合」という森林を守る組合活動があり、育林コンペ、それから遠浅の自治会活動という形で森林とかかわる10年以上の取り組みがあり、各種のファンクラブもこの苫東地域で展開されていたという背景があります。



「環境コモンズ研究会」は、新たにアイデアを出して検討していくというよりも、すでに多くの実践の積み重ねがあるわけで、それらをどのように発展させていくかというのが主たる議論でした。NPOの設立についても、広い勇払原野の地域では、すでに幅広いNPOの活動があり、そういう活動との連携の中で進めていこうというものです。

大きな目的であった「NPO苫東環境コモンズ」は、去年のフォーラムを開催したときには、さあこれから作りましょうという段階だったのですが、その後、10月に設立認可申請をして、今年1月に法人登記をし、正式に設立されました。会員の募集開始は今年4月からということで、やっと今年度からNPOの活動が始まりました。活動も少しずつ始めるようになって、今、正会員35名、団体8名、特別会員5名という状況です。

次に、今後の拡大をどう進めていくかということですが、苫東の工業用地は、主体は「苫東」という会社が持っていて、昔は会社の管理する中に緑地があったわけですが、この緑地について少し柔軟に考え、外側の幅広い担い手と一緒に進めていこうという取り組みのイメージです。「苫東」の中にも緑地の検討委員会があって、これからNPO活動とは包括的な協定を結びながら利用の在り方を考えていこうという仕組みになっているようです。

では、一体、「苫東環境コモンズ」はどこで何をするのか。具体的に例示します。ミズナラとかコナラ林という苫東緑地に多くある森林の保全、それから市民にオープンな形で利用してもらえるような、フットパスという利活用の方策、あるいは自然情報ということでヒグマの移動に関する情報収集とか各種の調査活動を、苫東のこの空間の中で幅広く展開していこうというのが活動のイメージです。



苫東の中にある大島山林でも、台風などで風倒木があり、管理を必要とする状況があるわけです。こういう中で、ただ所有という形態の中で放って置いていいものか？そこに、いい意味での利用、あるいは森林の管理という取り組みが何らかの形で必要ではないかということです。

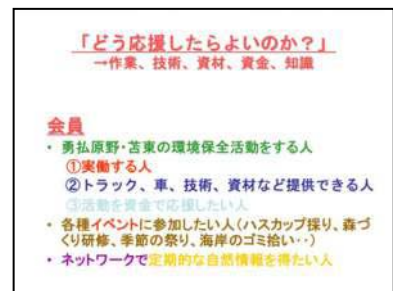


それから、フットパス。柏原という地域は本当に快適な空間です。静川、ここにもフットパスのコースがある。そういうコースの整備、環境整備に取り組んでいこうということで、サインを作ったり、テストウォークが進められています。



今年の取り組みだけを見ても、フットパスのサイン設置、バードウォッチング、それからハスカップ摘みなど、大変魅力のある活動が実施されています。あと砂浜のウォークとか、「月例遠足」という苫東の魅力を探る大人のツアーなど、いろんな取り組みが始まりつつあります。

では、どのようにNPO活動にかかわっていけばいいのか、活動内容を区分けして考えていきますと、会員といっても、苫東の地区に入ってきて実践的に環境保全をする方。少し離れていてなかなかそこまではできないけれども、トラックとか車、技術、資材などが提供できる、そういうお手伝いをされる方。あるいは、活動資金で応援したいという方と、さまざまなタイプがあるのではないかと思います。こういう方たちとの協働をどうシステムで展開していくかは、今後の大事なところだと思います。イベントだけに参加したいという方もいるでしょうし、ネットワークで定期的な自然情報を得たいという方たちもいると思います。こんな取り組みに関しては、道東の浜中町の三膳さんが来て



ておられますけれども、霧多布湿原でのこれまでのNPO活動の経験を勉強しながら進めていきたいと思っております。幅広いネットワーク作りとともに、実践的な除間伐、フットパスの整備、それから自然情報をうまく使った生物歴とかイベント歴を作成するという、苫東をフィールドとした活動メニューは様々なものが考えられており、通年の活動を通じた循環とか清掃という取り組みも大事です。

NPO会員になった場合、どういうメリットがあるのか。これも非常に大事なところです。会員になれば、常に通年アクセスできるという形態です。また、そこで生産されたもの、出てきたものを優先的に利用でき、自分自身の活動を「私の林」とか「私の山」と一体化して呼ぶことでより愛着が生まれるというアイデアもあるのではないかと。これは現在、検討中です。

これからの懸案といいますか、大事なテーマなのですが、担い手をこれからどれだけ幅広く募ることができるか、それが活動の基盤になります。それから財源の確保、これも大事なことです。全国的にもNPO活動をしっかり安定的に維持していくための持続的な収益事業を持つことが課題にな

っています。財源をしっかりと確保していくということも必要になると思います。

また、苫東の空間、土地の所有者は「苫東」という会社です。そことの関係づくりも大事なことです。他のグループとの連携によって、この地域の価値をさらに高めていくというやり方もあるかも分かりません。あとは、私自身がかかわっているコモンズ研究会というような研究ベースの活動も引き続きやっていく必要があるということで、まだまだ多くの課題、懸案もあります。

専門的な検討になりますが、NPOがこれから樹林地をどう管理していくのか。ある程度手を入れずに放って置いても良いところと、きっちり手を入れながら修景的な魅力を出すところなど、同じ空間の中でもさまざまな管理のレベルがある。それに対してNPOはどうかかわっていくのか。そういう議論、検討もこれから必要になります。

それから、大事なのは会員をいかに広げていくかということでしょう。正会員と同時に支援会員がありますが、今日、三膳さんの情報を頂きながら考えて検討していく大きなテーマ、「ファンクラブ」という幅広い全国的な応援団作りというのが、これからのNPO活動にとっても大事ではないかと思います。ただ、それもアイデアだけではなくて、苫東らしい、苫小牧らしい、環境コモンズらしい取り組みを実践的にどう展開していけばいいのか、これもこれからの大きな課題だと思います。以上、これまでの環境コモンズの系譜、取り組みを簡単にご紹介しました。

会員わくの拡大 2010/10/16総会

- 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人 *（総会の議決権あり）
- 支援会員 この法人の目的に賛同し、この法人の事業を支援するために入会した個人。支援会員を「ファンクラブ会員」と呼ぶ。
- 団体会員 この法人の事業を賛助するため入会した団体。
- 特別会員 本会の趣旨に賛同し、かつ代表理事が必要と認める学識経験者等。

ここからは、私自身が環境コモンズ研究会の座長をしているものですから、コモンズというのはい体何かということについて、みなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

今、「新しい公」とか、「新しい公共」とかわれています。限られた政府財政のもとで、すべてを政府活動に頼るのではなく、自助、共同で担える社会的な仕組みをつくりあげていこうという大切な潮流だと思います。その中で、コモンズという概念が、これからの時代の大切なコンセプトではないかということで、四つの視点でこれからお話をします。最初の二つの視点は、前回もお話したのでダブるかも分かりませんがご容赦ください。

私の専門は地域開発政策です。地域のこれからの発展、しかも持続的に、次の世代にも、あるいはその次の世代にもつながる地域の活性化、発展の在り方はどうあるべきか、というのがテーマです。

そこで、考えなければいけないことは、地球の資源は限られており、それを前提に地域の政策、国の政策も考えていかななくてはならないということです。すでに20世紀には「オイルショック」というものを経験しました。1970年代です。そのときにもこの問題提起はあったのですが、改めてこの議論を考えさせる契機になったのは、90年代以降の、地球温暖化という問題です。有限の資源をどのように効率的に活かしていくか、そこでの大きな流れとして、「排他的」「独占」「縦割り」から、これからは「共生」とか、「連携」、「協働」という方向に行くべきではないかと思っています。その背景には、限られた地球資源の中で、我々はどう生き抜いていく知恵を持つべきかということがあると思います。そういう中で、持続可能な発展、持続可能な開発、地域づくりということが言われるようになりました。20年後、30年後でも、今ある環境資源を破壊しないように維持しながら次の世代にも使える、「持続可能性」ということ。この10年、こういう問題を考えていくうえで、「持続可能性（サステイナブル）」という言葉が出てきたことの意味はとても大きいと思います。持続可能性は、「時間軸」の概念だと思います。今を起点にすれば、20年後、30年後を50年前

コモンズの視点(1)

人類共通の資源:地球
オイルショック、地球温暖化

排他性、独占、タテ割り→共生、連携、協働

時間軸:持続可能性(Sustainable)

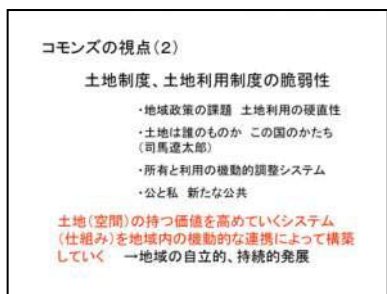
空間軸:コモンズ(共有、共利)

関係軸:NPO ソーシャル・キャピタル

の状況を見て今を見ながら、その反省のもとに考えていくということです。

それに対して、空間軸で考えるのが、コモンズです。1人が独占的に使うよりも、幅広く共同で使う、連携による使い方を工夫することによって空間の価値が高まって、地球という限られた資源がそこに住む人たちによってより大きい価値をもたらすような使われ方ができれば、それは持続可能なこれからの地域づくりにとって大事なことではないか。それがコモンズの意義です。コモンズというのは、「共有」とか「共同利用」といろいろな意味で使われていて明確な定義はないのですが、コモンズに込められた概念（コンセプト）はこれからの時代において、極めて大切なコンセプトだと思います。大きな時代の流れの中で、コモンズの位置づけを理解していく必要があると思っております。併せて言えば、時間軸の「サステイナブル」、空間軸の「コモンズ」に加えて「関係軸」ということで、NPOとかソーシャルキャピタルとか、社会的なつながりがこれからは大事です。

二つ目の視点は、私自身の研究領域である地域政策研究の立場から見ると、わが国における土地利用制度の硬直性、脆弱性というのが、日本の地域政策の大きな課題となっています。日本の場合は、土地利用に対して土地の所有権を極めて強く認めているものですから、いったん土地の所有者になると、その利用に関しては極めて排他的になるという特徴があります。今、中国から日本の土地所有を



求める動きが注目されていますが、中国人は自分の土地でも70年以上は所有できないのです。しかし、日本の土地なら一生、ずっと次の世代にわたって持てる。こんな国は世界にないわけです。そういう意味で、地域政策の中でいかに土地利用の硬直性を打破するかというのは、大きな問題です。司馬遼太郎は歴史小説家であり、晩年は、政策面での発信もされていましたが、彼が最後に主張していたメッセージは、この国の形を考えるうえで、日本の土地所有制度を改めない限り、日本は崩壊していく、というものでした。土地は誰のものかということです。所有と、そこをどう利用するかという、システムづくりは、これからの日本のまちづくり、国づくりを考えていくうえで、私は大変大事なテーマではないかと思っております。そういう意味で、土地、空間の持つ価値を高めていく仕組みとしてのコモンズという考え方を、我々は、いろんなところで問題提起していく必要があると思っております。

3点目は、今日初めてお話ししますが、コモンズの問題を議論する中で、最近、私は「共用」という言葉を使うようになりました。一般的に「共有」という言葉がコモンズの訳とされている例が多いのですが、所有の「有」というよりは、お互いに利用する、柔軟な仕組みづくりとしてのコモンズとして、「共用」という考え方に、最近、私は傾きつつあります。これからの時代、特に北海道、この地であれば苫小牧ですけれども、地域が自力でどう発展していくかという



ことが、強く求められています。そのためには、もう国の政策に頼るのではなくて、独自の創造的な仕組みを地域から提案していかななくてはならない。そのときに何が大事かというと、自分だけの企業活動が利益を上げればいい、自分だけの生活が豊かなものになればいいという、その発想だけでは限界があるということを皆が理解していくということです。自分がかかわっている地域全体がトータルで発展することによって、結果的にそこに安定した地域社会が生まれて、自分の企業経営も生活も豊かになるという発想でこれから考えていかないと、ある企業だけがいくらうまくいったとしても、後ろを向いてみたら、それを支えていた地域が崩壊していたという時代があるかも分からない。そういう

う意味では、単一的目的利用という発想から、共有的利用、つまり共用、モノに対してポリ、複層的、重層的利用を考えるということです。モノフォニーに対するポリフォニー、いわゆるハーモニーを奏でることによって、音楽は一層魅力を増します。だから、共用によって空間の魅力や価値が増す、という考え方です。それを地域全体と個の問題に置き換えれば、コミュニティー、あるいは地域全体の経済的価値が増すということです。これを目指す取り組みをしていくことが、個々人の生活、個々の企業経営にとってプラスになって、明るい展望が開けてくる。特にこれからは人口が減少していく。政府の財政資金も、支援する取り組みも今、限界に来ている。そういう中では、今ある地域の資源、空間資源をこういう形の共用に向けての仕組みを取り入れ、価値、雇用というものを再配分しながら、お互いの取り組みが地域全体の取り組みの中にうまく組み込まれて、全体がウィンウィン（Win-Win）の関係になるものを目指していく必要があると感じております。

最後に、では共用とは具体的に何かという事例をお話しします。今、地方にとって、都心部がどんどん寂れてきているという大きな問題がありますが、ヨーロッパでは、同じような5万とか10万人の都市でも、都心部に人が集まって、本当に賑わいをもたらしている都市が多くあります。それらの都市の中心には、教会とか広場、それから商店街などが共用空間として機能しています、みんなが集い、利用し合うゆったりした共用空間が大きな魅力になっています。実は、これは、北海道においては伝統的に取り組まれてきているのです。例えば札幌の大通公園は、道路をコモンズ的な魅力ある共用空間にしているという事例ですし、旭川市にある買物公園、あれは国道ですが、それを、昭和44年という昔に、既にきちんと歩行者も使える共用空間にしたのです。ただ、残念ながら最近はそのような取り組みが少ない。私は釧路に住んでいて、こういうコモンズのような共用空間はどこだろうかと探すと、郊外の大規模商業施設などが共用空間になっているのです。みなさんお休みになるとそこに出かけて行って、大規模商業施設でくつろいでいるという姿はどうでしょうか、やはりいびつだと感じます。そういう意味で、都心部の活力を増すことを考えていくためには、都心部の中心にコモンズ的な空間をどのように作りあげていくかという発想で議論を進めていくことが必要ではないかと思えます。

コモンズの視点(4) 共用の事例

- 都心部の活力:教会、広場、商店街などの「共有空間」の魅力。大通公園、旭川買物公園など。今や、郊外型の大規模商業施設が共用空間に。
- 空間移動手段の共有化:公共交通の役割(交通弱者の増大)、カーシェアリングなどの共用システムの普及
- 公共空間のコモンズ化:空港、港湾の多目的利用による価値向上。河川空間の日常利用。道路空間の駐車場的、歩行空間の利用。

2番目の事例は、「空間移動手段の共有化」ということです。交通の大きな問題の中で、公共交通の問題があります。あまりにも自動車に頼り過ぎた地域構造、交通構造ができ上がってしまっている中で、高齢化して車に頼れない人たちが出てきている。そういうときにバスが実際に便利かという、皆が使わないから、使いづらい、値段の高いバスしかない。そういう中で公共交通の役割が、改めて大事になってきている。地球環境の問題もあります。今、札幌あたりではカーシェアリングがかなり普及してきています。でも、公共交通にしても、カーシェアリングにしても、見方を変えれば共用システムです。みんなで一緒に使おうという仕組みをこれからの地域社会の仕組みに展開していくことは大事ではないかと思えます。更に、これまで公共空間の空港とか港湾は、それを使う人以外は一切入れないという利用でした。海外の空港と日本の空港を比べたときに何が違うかという、日本の空港は、ただ飛行機を安全に飛ばす機能を維持する空間です。海外の空港に行くと、多くの人たちが集まる、最も消費を生む空間ということで、多目的利用にすることで結果的に空港機能の価値向上が図られているという差があります。日本でもここ数年、そういう方向に向き合っていこうという動きが出てきていますが、公共空間の共有化というのは大切な方向だと思います。空港とか港湾だけではなく、河川空間も今までは安全管理のために閉ざして、排他的利用でしたが、日常的に幅広く利用して

いけるような共用化を目指していく、コモンズとしての魅力も高めていくという発想が必要でしょう。

道路もそうです。道路は車が走る場所ですが、一方の車というのはほとんど止まっている状態が多いのです。止まっている車の有効な利用のために道路空間をどう活用するか。こういう発想が大切です。しかし安全管理を目指す警察行政からは、こういう共有利用の政策は出てこない。しかし、道路空間を道路だけでなく、駐車場的に利用することによって、地方の都心部のにぎわいが戻ってくることを考えると、共用化は地域にとっての大きな活性化の政策手法であり、これからはそういう提起をしていくべきだと思います。今日は苫東環境コモンズの話ですが、コモンズを共用として考えていく意義は、幅広い分野にあると思います。これからの地域社会の発展は自分たちで担っていかなければいけない、そこでは自分たちの力で生き抜いていく新しい仕組みとして、コモンズというのが大事なコンセプトになるのではないかということをお願いして、今日のフォーラムの基調報告を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(司 会)

小磯先生、どうもありがとうございます。

次に、NPO法人霧多布湿原トラストの三膳時子理事長に、「霧多布湿原トラストのファンはどうして生まれたのか」というテーマで、基調講演をお願いいたします。

4. 基調講演

「霧多布湿原トラストのファンはどうして生まれたのか」

NPO法人霧多布湿原トラスト 理事長 三膳 時子氏

みなさん、こんにちは。霧多布湿原トラストの三膳時子と申します。名字が珍しいといわれますが、私の主人は、北海道に渡ってきて三代目で、出身は新潟だそうです。プロフィールがお手元にあると思いますが、主婦です。私の主人は、サケ捕り漁師です。今、最盛期で忙しいのですが、地球温暖化の影響なのでしょうか、今年はとても不漁だそうです。



まずは今日、苫小牧にお招きいただきありがとうございます。そして、環境コモンズ初の総会がフォーラムに先立って行われ、無事に終了したということでおめでとうございます。1年過ぎて環境コモンズがこれからというときに、霧多布の活動がお役に立てばということでお話しさせていただきますが、小磯先生のお話にあったように、「コモンズの視点はこうだ」というきちっとした計画性があるのNPOの出発は、霧多布湿原トラストとしてはとてもうらやましいと思っています。湿原トラストでは、「霧多布湿原を未来の子供たちへ」という形で活動し始めましたが、このようなきっちりした計画がなく、「自分たちが遊ぼう」というところから始まったので、すごく時間がかかっています。湿原トラストを始めてから25年経ちました。これまでの活動を振り返り、こんな形がよかったということをお話しさせていただきます。今日は、パンフレットを持ってきました。このパンフレット1枚で私たちの活動が大体分かるように作ってあります。後ほどゆっくり見てください。

まず、ロゴの意味ですが、説明しないと分からないと思います。

「これ何？へび？」みたいなことを言われるのですが、これは湿原の川です。あとはWet landのW、タンチョウの羽ばたき、湿原を渡る風、湿原を蛇行する川、そういう意味を持ったロゴにしました。自分たちにかかわる方が考えて下さったものです。後で聞きますと、それはペリカン便のロゴを考えた人らしく、そんなこととはつゆ知らず、お金も使ってないのに、1回、2回駄目出しをしたという、そんな失礼なところから始まったロゴです。



浜中町、霧多布湿原の位置はみなさんご存知かと思いますが。町の人口は1万2,000人以上いたのですが、今は6,800人。どんどん減る傾向にあります。酪農と漁業、半農半漁のまちです。今、サンマの時期です。漁業は、サンマからイカに移り変わってきていますけれども、コンブが主流です。霧多布湿原が3,160ヘクタール。昨日、苫東を案内してもらいましたが、緑地だけで霧多布湿原と大体同じ面積で、緑で囲まれた、「北海道〜！」という感じで、素晴らしいところだと思いました。

霧多布湿原は「花の湿原」ともいわれています。6月の下旬にはワタスゲの群落が見られます。みなさんも北海道の方ですから、湿原と言えば同じような花を見ていると思いますが、これだけ広大に花が咲くところは他にないのではないかと思います。ワタスゲが終わってから、エゾカンゾウという花に変わります。この花の中



を、タンチョウがずっと営巣しています。観光客の方に、夏の湿原にタンチョウがいることを言うと、「何で夏にタンチョウがいるの？」と、驚きます。冬の鳥のような感覚なんですね。でも、霧多布では冬にはタンチョウはいないのです。

霧多布湿原トラストの活動は24年前、1軒の喫茶店から始まりました。現在の事務局長である伊東という者が、湿原をゆっくり見渡しながらかoffeeを飲める喫茶店を建て、移り住んだことから始まったのです。

トラストの沿革はこのパンフレットに書いてありますので、詳しくは読んでください。第1号から購入という形で、2000年にNPO法人の資格を取得し、そこから「湿原を売ってください」という声を出して、始めました。

2000年から始めて、濃いピンクが買ったところ、薄いピンクは、当時借りていたところ。貸していただいたところから始まりました。昔は、海岸線の湿原は共同牧場として使っていて、地主さんのほとんどが、海岸線に住む漁師です。その漁師さんたちに「私たちは湿原を買います。譲ってください」という手紙を出すようにしました。2009年、大体今のピンクになってきていますけれども、今年も二、三件買い取ることができました。



去年、大きなプロジェクトがありました。琵琶瀬展望台というところがあります。そこは、当時共同牧場として使っていた人たちの農事組合が持っていたところでした。ところが40年、50年経ったときに、組合の組合員で農業をやっている人が1人もいなかったのです。ですから、解散という方向になって、土地を全部売りたいということになりました。地主さんに「土地を買います」と連絡して



いたのですが、さすがに1,200万円はありませんでした。うちの会費は、24年前から1,000円なので。毎年1回は報告という形でみなさんに情報誌をお送りし、その他に産業を紹介する情報を年末に出しますが、何せ会費が1,000円ですから、「切手代で消えてしまうのでは？」という会員さんの声もありました。そのときは冗談で、「1,000円ですけど、何かあったときにはお願いしますね」と言っていたのに、このときになって初めて「みんなにお願いしようか」となり、寄付を募ったのです。リーマン・ショックもあったし、住むところがない人もいるぐらい社会的にとっても大変なときで、「寄付してください」なんて言っているのかというぐらい、不安でした。でも、20年以上もこういう形でやっている自分たちがどう思われているか確かめたいということもあったし、この場所はとても買いたいところでもあったので、みなさんにお願いしたら、2カ月の間に1,800万円集まったのです。あっという間。それはびっくりしました。

私も、いろいろなメッセージを出して、「寄付してください」とお願いしました。こちらが願うのです。そうしたら、返ってくるメッセージが、「ありがとう」という言葉なのです。「え？ありがとうございますのはこっちのほうですよ」と思いましたが、素晴らしい環境を未来の子供たちに残さなければならないという気持ちを込めて、頑張ってくれてありがとう、というメッセージをくれるわけです。

それと、政府の景気刺激策の定額給付金の支給(12,000円)があり、それが功を奏して、霧多布に向けられたのです。それは全く想定外でした。一般の人たちは、自分の税金はちゃんと分かるものに使ってもらいたい、という思いがすごくあるようで、それはもう二度、三度、とびっくりした出来事で

した。

霧多布湿原は、その3分の1、1,200ヘクタールが私有地ですが、面積的にその約半分をこのような形で買わせてもらっています。花が群生する地主さんの土地など、買いたいと思うところはまだまだたくさんありますが、その地域に合ったリズムというのがあると思いつつ、ゆっくりやっています。

まず、土地を買うこと。湿原は、昔は宅地として埋め立てられました。それから、漁家なものですから、コンブを干す場所として埋め立てられたところもあります。でも、人口が半分に減ってきて、廃屋としてそのまま残されているところがあるので、湿原に戻すところがこれからどんどん増えてくるのではないかとということで、小さな湿原修復という形の実験地を持って、湿原らしく戻っていくのに、どれくらいの年月が必要かというデータを取ると、大体7年ぐらいで見た目では分からなくなるようです。

霧多布のファンには本当に支えられています。そのファンづくりはとて幅広く、情報発信から環境教育から、漁業と酪農の産物を紹介する交流を持つなど、ファンづくりはどんどん増えています。

ファンのみなさんは、一緒に作業をしたいのです。例えば、木道作りではその作業と一緒に汗を流して、地元の人と交流したいというのがすごくあるようで、前泊して、後泊するという形で、この作業の1日をやるためのファンがいるのです。ファンとの交流は、友好的な自分たちもとても大事にしていることの一つです。



うちの職員にもすばらしい、よくできたガイドがいますが、そのガイドが説明するよりも、本業の漁師さんなり酪農家さんが説明して

おもてなしするのが、とても友好的なことで、漁師さんや酪農家さんにファンがついて、喜ばれる。人を知り、人と人がつながり、霧多布のファンがどんどん増えてきたと思っています。また、湿原トラストには、地元理事が多くいます。若い職員が地域に溶け込んでいくときに、この地元理事たちが友好的なので一緒に行くと、酪農家さん、漁家さんのおじさん、おばさんにすぐ顔を覚えてもらえます。そのように、地元理事がいてくれてとても助かっていますし、24年間やってこられた、地域での信頼でもあるかと思います。

今、全国に2,800人の霧多布湿原トラストの会員がいます。会員の中から、また勝手連としてファンクラブがあります。北海道、東京、鹿児島、九州の博多なのです。どうして、九州や鹿児島に？と思われると思いますが、「自分は社会貢献したい」という方が社長や会長になり、その親友が「おまえがそんな社会貢献をやるのだったら、おれもやる」と、広がっているのです。



このファンクラブの力はとても大きいのです。このファンクラブの

みなさんが何をするかというと、「北海道のこんな小さなまちに、こんなきれいな湿原をそのまま残したいという人たちがいる」「ちょっと行ってみよう」とみなさんが誘って、親友仲間を連れて霧多布に遊びに来てくれる。来月早々、佐賀にファンクラブができるそうです。東京の方が定年で佐賀に帰るといいます。それで、「佐賀でも霧多布を応援したい」「またそこでも環境を考える仲間がいるから、ちょっと話しに来てくれない？」というのです。1人でも2人でも、ファンクラブと名乗ったらファンクラブなのです。だから、来月、佐賀に出かけてこようと思っています。

このように、霧多布にかかわっていることが、とてもうれしいという人たちがファンクラブなのです。ファンクラブの人たちの期待というか、こんな小さな霧多布をどうしてこんなに熱く応援してく

れるのか？どう答えたらいいだろう、という気持ちがあります。しかし、応援団のみなさんは「地元の人達が、しっかり子供たちに教育したり、湿原を見ながら、そこでゆっくりした時間を過ごせるような環境づくりをしてくれればいいのよ」と言います。

霧多布湿原にみなさんをお連れして、「とてもきれいですね。すてきなところですね」と言ってもらうのがうれしいです。また、応援団のみなさんはきれいなところを見て、事務所に立ち寄り、理事たちに会ってというのが、とてもうれしいようなのです。霧多布はおかげさまで二十数年、個人の方や、企業のみなさんの会費や寄付に支えられながらやってきています。その他に「パートナーシップ協定」というのを、自分たちと「セブン-イレブンみどりの基金」との間で交わしています。みなさん、ご存知でしょうか、セブン-イレブンのレジの横にある寄付ボックスが、みどりの基金の元なのです。全国で集まるのが、年間3億円以上です。土地を買うための支援もしてもらっていますが、買った土地には維持管理費がかかるということで、1回の寄付ではなくて、継続した寄付を受けられるよう、みどりの基金と協定を交わしているのです。「マッチングギフト制度」は、社員さんが給料の端数を寄付し、その同額を会社が寄付する制度です。あと、協賛企業として、ハーゲンダッツ ジャパンさんからも頂いています。浜中町に工場がある高梨乳業さんが原料を厳選してハーゲンダッツに納めてから、つながるようになりました。ハーゲンダッツのアイスクリームの原料は浜中町から出ているのです。昔は90%以上だったのですが、シェアが広がってきて、浜中町の牛乳だけでは足りなくなってきたようで、今は70%のシェアで浜中町の牛乳を使っています。浜中町はとても良質な牛乳を生産するということで、もう20年以上もハーゲンダッツの原料を供給しています。私たちの事務所に来た人に「ハーゲンダッツのふるさと・浜中町」と言うと、みんな「えー！」と驚きます。

寄付ばかりだけでなく事業収入として、いろいろなターゲットに対応する事業形態ということで、ツアーもやっています。「ファンクラブツアー」というのは、北海道の人たちにしてみたら見慣れた景色の牧草地を歩いてきて、地元のチーズと牛乳、それとクラムチャウダー的なものを作っておもてなしをするもの。このツアーのときにももらったアンケートによれば、牧草地の片隅でランチをしたのが、とてもうれしかったようです。



「ウニツアー」は、漁に行つてウニについて漁師さんに説明してもらい、浜中の沖の無人島に上陸して、ウニむき体験をしてウニ丼を作って食べる。それはもう、とてもぜいたくなツアーができます。自分たちは、まちの産業の酪農と漁業を紹介して初めて、エコツアーではないかと考えています。自分たちが浜中で活動していくには、まちの産業が元気にならないと自分たちの活動もできないと思っていますから、お客さんとまちの産業の間にNPOがあつて、その人たちをつなげるという意味でとても重要であると考えています。



浜中町から、霧多布湿原センターの指定管理を受けさせてもらっています。実際は、霧多布湿原トラストが少し持ち出さないとやっていけないのですが、それでも自分たちの事業が膨らむし、何よりも子供たちの環境教育ができるというので、今年、改めて5年契約をさせてもらいました。最初の5年は、公募なしに自分たちが受けさせていただき、やりましたが、今回は町民にも行政にも、霧多布湿原トラストだから任せる、ということをちゃんと認めてほしかったので、町には公募してもらい、任せて頂けることになりました。

湿原センターでは、ミュージアムショップというものがあります。これまで、酪農や漁業では生産だけで、加工品がありませんでしたが、自分たちのおいしい牛乳を売りたい、コンブを売りたいという一生懸命な思いで、3~4人のおかあさんたちが小さな工房で頑張っています。NPOが何かできないかを考え、地元のものを紹介するという思いでミュージアムショップを開いていますし、商品にも力を入れたと考え、去年“コンブバターあめ”というのを一緒に考えました。



私は地元でしたから、湿原の中で遊んでいましたが、子供たちに「湿原を大切にしているから、湿原に入ってはダメ！」ということでは、湿原で何が無くなってしまったのかも分からなくなってしまいます。ですから、勉強するエリア、つまりにおいを嗅いだり、花びらが何枚あるか触ることができるエリアがあってもいいのではないかと考えています。また、湿原のあるまちなので、子供たちに湿原を教えていきたいということもあって、子供たちと一緒に見て、感じて、触ってという教育を目指して、月に1度はいろいろなプログラムで「霧多布子ども自然クラブ」を展開しています。



みなさんにお願ひがあります。パンフレットの中に寄付袋が入っていると思います。子供たちに湿原を残したいという思いで、これを用いました。みなさんよろしくお願ひいたします。

コミュニティービジネスというのでしょうか、去年から、酪農家さんや漁家さんのお母さんたちと一緒に商品開発のプロジェクト始めて、「コンブバターあめ」を作りました。名前は「霧中夫婦」。1次産業はご夫婦で頑張らなくてはやっていけないので、一生懸命やっているという意味を込めたキャッチコピーで、プロジェクトで考えた名前です。これが300円ですが、8粒しか入っていない。とても高いと思われると思いますが、これで6畳1間の湿原が保全されるという商品なのです。パッケージも自分たちの手作りで、ずっとかかわってほしいということで、漁家さんとか酪農家さんのご夫婦に考えてもらった川柳がパッケージの裏に書かれています。川柳の「何とか賞」というのがやれたらいいなと思っています。このあめは、施設の子供たちに作ってもらっているので、形はまちまちで8個入っています。それと、コンブのまちの宣伝に、おしゃぶりコンブが3枚入っています。



今日は寄付袋に300円入れてくれたら、こちらを差し上げますので、ちょっと食べてみてください。ありがとうございました。(拍手)

(司会)

三膳さん、大変ありがとうございます。まちづくりもトラストも全部入っていて、聞いていて非常に楽しかったです。

次に、NPO法人ねおすの宮本英樹専務理事に、「地域力と環境保全をどうつなぐのか」をテーマに基調講演をお願いいたします。

5. 基調講演

『地域力と環境保全をどうつなぐか』

～NPOねおすの実践～

NPO法人ねおす 専務理事 宮本 英樹氏



こんにちは、宮本と申します。楽しい話でしたので、三膳さんの後はちょっと話しぶらいですね。

ところで、この中で黒松内に行かれた方は、どれぐらいいらっしゃいますか？では、近いところで、登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」に行かれたかたはいますか？あまりいない。苫小牧ではあまり人気がないですね。（笑い）絶対ないと思いますが、網走市にあるオホーツク数学ワンダーランドに行ったことのある人、いますか？いない。これはつぶれてしまったのです。僕もいろんなプロジェクトをやっていて、失敗したものもあります。すべてが成功というわけではないのです。

三膳さんは地元にお住まいになって、地元を愛し、地元から発信するという感じだと思いますが、僕は、いつも地域とよそ者の中間にいるのです。宙ぶらりんな性格もあり、いつも宙ぶらりんなポジションにおります。どこかの地域再生とか地域の保全を頼まれたときにも、月に2週間ぐらい住む生活を2年間ぐらい続けながら、どっぷり漬かるほど勇気がなく、かつ悪口を言われるのに耐えられないので、時々逃げたりというような感じで、地元の人とよそ者との中間のポジションを得て仕事をしています。黒松内の自然環境プロジェクトとか、登別ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」の立ち上げといったことをやってまいりました。

今回のテーマが「地域力と環境保全をどうつなぐか」ということですが、そのためには地域の人たちの意識をどのように環境に向けていくかというのが、スタートにあると思います。僕がこのテーマに触れたのは、小学生ぐらいの頃です。出身は道東の置戸町というところ。オホーツク海側から内陸に入ったところで、有名なものと言えばオケクラフトとか木材といった町の出身です。1970年代に少年期を過ごしました。当時の日本は、高度経済成長で道東に開発のお金がどんどん落ちるようになり、自分が遊んでいた自然河川が三面張りになっていく。もちろん、うちのおやじや近所のおじさんたちも、都市化こそが近代化であるということを感じて疑わない頃でした。

僕は子供でしたが、自分の周りの環境が変わっていく、子供ながらに遊び場がなくなっていってしまうのですから、心穏やかではない。しかも、その遊び場を率先して壊しているのが自分たちの親だというのがこれまたショックなところもありました。そういう幼少期を過ごし、大学を卒業して新聞社に就職しましたが、北海道はこれから自然を使った新しいことをやっていくべきではないかと思い、北海道自然体験学校（Natural Experience Outdoor School）「ねおす」に参画させていただきました。田舎では親や親戚中から猛反対され、どうしたらわかってもらえるかを考えたのがスタートです。

「ねおす」にお世話になる前、僕は違う勉強でアメリカに行っており、ルームの仲間からマイアミから飛行機で1時間くらいにあるエコツーリズム発祥の地のコスタリカを教えられ、行くことにしました。コスタリカでは、太平洋側の森の中で珍しい動物の写真を撮っていたのですが、その森で動物の写真的撮り方を教えてもらった、漁師とバーをやっているカルロスさんに、「コスタリカの自然、カウイタ地方の自然は大切なのか」と聞いたところ、「大切だ。なぜなら、おまえらみたいなのが来なくなったら、おれの酒代が減ってしまう」と言ったのです。これを聞いて、うちのおやじと周りの

おじさんたちを引き込むには、酒代がいいのではないかと思ったのです。僕も農家出身ですから、組合管理の苦しさをよく知っており、現金の小遣いのなさというのはよく知っていたので、1日何杯かビールを飲ませることができれば、こっちを向いてくれると思い、地元で小遣い程度のお金が稼げるエコツアーを始めてうまくいきました。

僕は、エコツーリズムといわれるようなものの問題点を旅行から考えるのではなくて、地元や地域のおじさんたちの環境への意識をどう変えるかの一つの手段として用いるようになりました。先ほどの三膳さんの話にも、地域のことや経済のことをなくして、環境保全が成り立たないということで、僕は常に三角錐をイメージしながら、こういったエコツアーは、地域力を自然につなげていくための手段として用いています。特に僕の中では、経済はビール代が払えるかぐらいの話で、あとはおじさんたちが元気になる、もしくは自分たちで何かを考える主体性を生むような、内発的発展をいつも考えています。

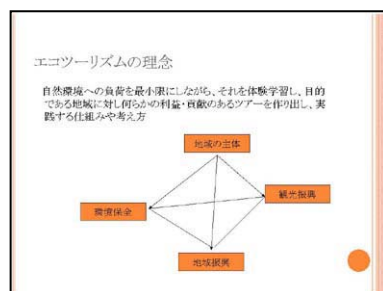
地域の人々と環境問題をくっつけるための道具としてエコツアーという形を作ることができるのです。しかも、世の中にただ広告を打つのではなくて、ツアーをやりますよという形で中間発表ができ、情報発信と形を作る作業が両方できるという利点を持っていると思っています。霧多布のお話では、当初はファンクラブでしたが、こういったツアーを地道にたくさんやられて、ファンを獲得していったのではないかと考えています。

「地域外とのやり取りと地域内の連関」ですが、地域内だけの連関ではうまくいかないことが多い。人間関係がある程度決まっていたり、新しいものが生み出せないときには、地域外と少しやり取りができるというところがツアーの良さでもあります。写真は、ツアーの一場面とも見れますし、漁師さんと消費者のやり取りとも見えます。漁師さんから見れば、「うまい、うまい」と言って食べてもらえるシーンというのは、流通が複雑な今の日本ではそうはなく、そういうところで自分たちがどういう商品を作らなければいけないのかを知る手掛かりになる。特に、こういったエコツアーに参加される方は決まって、「本物」を求めるような人たちだと思のです。

霧多布ファンクラブの方々もそうだと思いますが、本物を目指したい、あるいは自分たちに価値のあるものを探したいという人たちなので、そういう製品を作りたいと思っている生産者にとってはすごくいい消費者で、ダイレクトマーケティングができるようなところがあると思っています。そのためには、消費者が本物を求めるので、生産者も本物を求めなければいけない。さっき三膳さんがすごくプレッシャーを感じる、とおっしゃっていました。プレッシャーを感じると、人間は勉強するのです。勉強するというプロセスが内在しているということが、地域の人々を結びつける、あるいは成長させるとでも言うのでしょうか、そういうものがあると思っています。

それから、ツアーですのでお金をもらうことになります。こちらは、経営の視点です。マネジメントしていかななくてはいけないので、他の地域づくりとはちょっと違います。その対象が当然環境ですので、環境を大切にしていけるというので、僕はエコツーリズムを人々をくっつけるための手法として使っています。

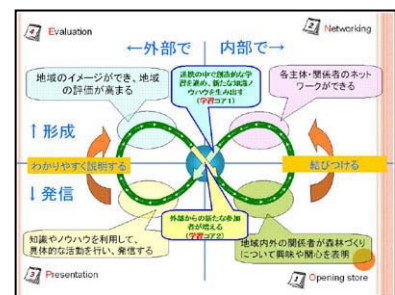
こちらの笑顔のおじいちゃんですが、霧多布で「おぼろ昆布かけ」



というものすごい技術があるのですが、当時は機械化されたり、とろろ昆布全盛でしたので、せっかく自分で培った技術も力を発揮できるところがなく、僕がお会いしたときは、本当にショボンとした感じでした。ですが、これを教えてもらうプログラムを作り、参加していただいたら、このとおりです。人に物を教えるとか、自分が役に立っているというようなことを再発見する場をつくってあげると、人はどんどん成長し、それが地域を成長させていく。そこが魅力かと思っています。ですから、エコツーリズムは観光という視点から見れば経済的な視点も大きいですが、僕自身は真のエコツーリズムの効果だと思っています。

エコツーリズムでは、商品開発もしてみたくなるものなのです。今まで、知り合いではなかった漁師の人と酪農の人がくっつかないと、旅行商品というのは作れないのです。あるいは、今までカヌーしかやっていなかったカヌーガイドも必ず、カヌーだけではなくて、漁とか行けないの？と言われてしまうので、一緒にやらないとできなくなります。そうなるとうつついて学習する機会も増えてくる。そこで初めて、内発的な経済とかコミュニティービジネスという話になると思うのです。しかし、そうやって地域が重なっていくのと、環境を大切にするという両方の心がないと、なかなか広がりません。昔は環境保護型というのか、この場所は保護しましょうというのがありました。それはそれで大切な場所があると思いますが、それではなかなか人は結びついてこないで、人がやっていることと結びつけていくということだと思っています。

これは、北大の教授になられた敷田麻実先生とか、多数の方がかわってお作りになっている「サーキットモデル」という考え方で、最初に右側で、地域内外の森づくりをやりたいという人が興味・関心を抱く。そういった人が集まって、ネットワークする。コモンズも今、だんだんそういう状態になっているのだと思います。その中で次に、ちょっとイベントをやろう。どうやってやろうかという話し合いが生まれて、イベントなりツアーという形で発信すると、コモンズというのはそういうことをやっているのだというイメージが地域に出てきて、そこに新たに加わりたいという人たちが増えてくる。そうすると、その人たちの強みや新しい考え方をに入れて、ネットワークを膨らませて、また新しい企画を考えて出していくということを繰り返せば、いろんな新規の参加者が中に加わっていくというモデルです。



そうすると、ネットワークを作ろうとする場合、一つは草薙さんのように頑張っ、芯になる人がまず重要なことと、霧多布では学習できる湿原センターがあったことがものすごく大きいと思います。学習できる場や機会でもいいのですが、拠点が必要かと思っています。もう一つは、それをいかに分かりやすく説明して発信していくか。発信して、「私も入れて」といったとき、その人たちをどう巻き込むか。また新たなネットワークを増やして、新たな人が増えてと、尽きないでやっていくことで、人もここについていくということ、いかに回せるか。そういうことが大切だと思っています。

後でもお話ししますが、学習のコア2と書いたところが僕は大切だと思っています。いろんな人が来ますが、参加できるルールをある程度最初に考えていた方が、後から大変になりません。役割のことです。あなたの役割はこれです、ということがコア2のところではっきりしていると、より多くの人々がネットワークしやすくなっていくと思います。

次に、受け入れ側のマネジメントをしてもらえないと言われて、最初にやったのが「黒松内ブナセンター」とか、「ぶなの森自然学校」という一連の施設群です。黒松内町には、当時本当に見捨てられたと言ってもいい97ヘクタールぐらいの北限のブナ林があって、これを「歌オブナ林」として目

玉に仕上げています。霧多布湿原みたいにきれいとか、苦東のように広大というわけではなかったのですが、危機感の中でうまく町民一体となって、ほとんど無かった流動人口が、15万人ぐらい入るようになり、今度はオーバーユースといいまして、入り過ぎというものになりました。オーバーユースになったときに、ブナ林をどう使うかという委員会が開かれ、学識経験者の方が何人かいて、地域住民がここをどう使うかということが問題なので、地域住民が一生懸命考えて決めれば良いという話だったのです。さっき言いましたように、僕はいつも宙ぶらりんなポジションにいましたので、その意見にちょっと違和感があったのです。

旭岳のロープウエーに乗ったことはありますか？旭岳のロープウエーで下りたときに、無理にレクチャーを受けさせているのがうちの職員ですが、うちの職員を見る機会としてはあそこが一番多いと思います。旭岳周辺の姿見の池も、ロープウエーを切り替えることでオーバーユースの問題が出るので、委員会をやったときにも、「そんなに大切な場所だったら使わなければいいのではないか」という意見も出ました。その方に、「あなたは、行ったことありますか？」と聞くと、行ったことがあります。大体、行ったことがない人がそういうことを言います。町民に決めろとって町民がいろんな意見を出しますが、あまりにもトンチンカンな訳です。なぜかという、行ったことがないからです。行ったことがないが、町の上役だから意見を言わなくてはいけないから、トンチンカンな意見を言うのです。

利用している人が考えれば、土地利用に対する適正な計画もできますが、地域に住んでいるからとか、そういう暗黙の了解的なところで決めてしまうと、全然適正にならないことに気づいて、地域住民も含め、利用者による自立的な環境管理ということを目指すようになりました。その考えを一番強く打ち出したのが、登別市の幌別川源流部に位置する、登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」という施設です。

あそこを作るときに、僕は登別市の教育委員会の教育課長さんの横にデスクを置かせていただき、1年間、教育委員会に座らせていただきました。教育委員会ではさまざまなクレーム、さまざまな要望が来る部署だということが分かりました。そのときに、どうやらあの方が「ふおれすと鉱山」をまとめてくれる人らしい、といううわさが流れると、いろんな人からの直訴が来るわけです。多くは、利用者とか地域住民がその場所を使うときに内在する要求なのですが、管理者との思いのギャップを解消したいというのが、行政施設にあるパターンです。管理者は管理するためのことを言いますし、利用者は利用の利便性ばかりを言うので、管理者と使っている側の思いが全然違い、すごくギャップがあるのです。それから、ある程度の自由度をもって使わせてほしいというのもあります。

もう一つ“鉱山町というのはもともと、おれたち山岳会が使っていたところだ！だから、おまえら、後から来て入るとは何事だ”のような「排他的」なこともあります。これは多分、苦東にもあると思うのです。“もともと使っていた”、“あそこはおれたちが先に占有している”と言うのは、裏を返せば、小さなコミュニティーを守っていきたい、あるいはコミュニケーション不足というか、コミュニケーションを取りたいという欲求にも取れるのです。コミュニティーとかコミュニケーションが希薄になっているのを、コミュニケーションをほかとは取らないというところで、利用者なりに内在するコミュニティーがある。先ほど三膳さんがおっしゃっていたとおりに、グループを作りたい、あるいは共通な目的や共通の思いを持っている人と仲間になりたいという欲求がすごく強いと思っています。

それから、自己実現。自己成長です。その場所を使って、自分が

地域住民(利用者)に内在する欲求

- 管理者との思いのギャップの解消
- 自由度の確保
- 排他的(コミュニティ・コミュニケーションの裏返し)
- 自己実現 自己成長
- 社会参画(社会とのつながり感)
- ロイヤリティ(特別感)
- 居場所

何かをやり遂げたいという思いや、女性に多い社会に参画したいというのがあります。今、登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」が、おかげさまで3万人ぐらい人が入るようになりました。その3分の1、一番のリードユーザーといわれる層は子育て中のお母さんです。それまで社会で働いていて、子育てになった瞬間に社会から隔絶された思いがあるようなのです。そのお母さん方が「ふおれすと鉱山」を通して、社会に貢献するとか、社会とつながっている、しかも環境についていいことをしているという中で、そこの欲求を満たしたいということです。

それから、「ロイヤリティー」ですが、特別感が欲しいのです。自分は特別な、大事な人です、と言われたいという気持ち強い。それと、先ほどおじいちゃんの話をしましたけれども、居場所です。自分の居場所がなく、自分の居場所を求めている。これぐらいが今、利用者といわれるような人たちなり、地域全体に内在する欲求かと僕は思っています。だから、これに応えるような運営とか設計をすれば、地域の人たちとつながって環境保全ができるのではないかと感じています。

まとめると、一つは「平等性の確保」といいますか、だれかが偉いのではなくて、みんなあることではフラットであるということ。役目、役回りは違うけれど偉さとかの問題ではないという平等性を確保してあげることが、つながりを生みやすいと思っています。

それから、地域住民も、よそ者でそこを使っている人も、そこを管理しなくてはいけない会社であっても、行政であっても、その環境を利用するという点では同じ利用者なのだという視点でその場所を保全していくということです。

管理者、利用者という関係ではなくて、利用者に権限をいかに委譲できるか、どこまで委譲できるか。そうじゃないと大体、「あれはだれか守っているところでしょ」「私には関係ないところだし」ということになる。それから、先ほど話しましたが、利用者への学習の機会を確保していくということです。何といっても、自然環境を知らない人もまだまだ多いのです。普段から、それは当たり前だと思っている方にその大切さを知ってもらうことが一番です。それから、学習の機会に合意形成を執るような練習。つまり、ばらばらにやるといろんな人が入ってくると思うので、そこで何らかのルールを先に決めた中で自由したいわけですから、ルールを決めるための合意形成を執るような練習は必要だと思っています。



それから、利用者側の視点からすると、管理者側を自分たちのほうにうまく引き入れる。三膳さんのところで言うと、行政をうまく誘導できるようにするには、相互理解するための協働と行政のことも分かること、管理者はこういうことが気になっていたんだ、という学習の機会を確保することが大事と思っています。ちなみに、ふおれすと鉱山というのは当時、地元NPOの代表の方がセンター長になっていて、利用者、役場の職員、市役所の職員、それから地元のNPOも全部、同じ職員室に席を置いて仕事をしていました。

いろんな目的で入ってくる方がいますので、大きな目標、共通項を見つけていくという作業は、コーディネーターには大切です。そのときのコツとしては、過去にあった事柄を思い出してみるというか、過去に成功した例が地域内にあるか探して、それを共通項にする。つまり、みんな同じ未来を見るというのは、不可能です。よく「ビジョンの共有」と言うのですが、みんな思っていることは違うので、共有なんて物理的にほとんど無理な話で、みんなが思っている夢のような話は、みんな同じなわけではない。ところが、過去に成功例があったら、それはみんな共有しているので、そういうことをやりたい、となります。

例えば、議員になった堀井学がスケートで銅メダルを取ったときに、学校は場所を提供し、リンクの整備は地域の人たちが行った。先生も指導したけれども、何かあるとみんなで応援して、「そこが誇り」とみなさんがおっしゃっていたので、登別市の鉱山町の管理もそのように、子供たちに何かを教えていくときに、僕らが教えるのではなくて、堀井学を育てたように、役目を決めて全員がかかわって、子供たちを育てるとというのがコンセプトの一つになっています。大きな共通目的で、地域内外でみんなが認められるような成功モデルを探して、「あのイメージです」と言ったほうが分かりやすいと思っています。

特に強調しておきたいのは、ここ20年ぐらい、「個性の教育」といって、個性が大事とやってきたので、人と違うということは、みんなすぐ言えるようになった。ところが、あなたと私は同じだ、ということは言えない。そのときに、どこまで下がっていくか。人間というところでは同じ。あと、カレーが好きというのと同じだねというか、どこまで下がって共通目的を見つけるか。NPOとNPOでも同じ。やっていることは違うけれど、この環境を守っているところでは同じというような、下がって共通項を見つけて、そこに大きな目標を見つけていくということが、いろんな人を巻き込みながらやっていくコツだと思っています。

それで、ルールとロール、規律と役割というのは、なるべく自由に使ってほしい、自由に使いたい、自由に共有していくのですが、問題は、どこまで自分たちで勝手に決められるかということだと思います。共有することは非常によいことだと思います。あるいは、共有スペースを作ることも非常によいのですが、どこまで自由なのか、個人の裁量なのかというのが最後に問題になってくる。「ふおれすと鉱山」では「閉じられたオープン性」と言っていて、ある程度コンセプトがあってそのコンセプトに共感できる人に対しては、自由に使ってもいいとなってますし、もう一つは、学習機会が幾つかあって、ある一定の到達レベルに達した人には、ここまで自由にやってほしい、ここまで加われるという役割とルールを決めた上で、一定の自由と責任をきちんと与えるということをしています。



最近、子供の遊び場について盛んに言われています。僕の中に居場所の定義というのがあって、遊びが人間にとっての居場所ではなく、役割とか仕事というものがあることが居場所だと思っているので、登別では子供たちにも盛んに仕事をさせることが多いです。

最後につながりですが、小磯先生のお話の中に社会関係資本、ソーシャルキャピタルという難しい言葉が出ていました。人が有機的につながって、うまくいっているところには次の社会投資も行われている。これは霧多布が一番いい例で、あんなに寄付を受けている団体は他にはありません。広報でうまくいっているということが分かって、みんながバスで行くとみなさんお金を出したがるのです。どうせ寄付するなら、死に金は使いたくないので、ちゃんとみんながうまくつながっているところには、投資といえますか、きっと寄付もしたいわけです。行政もみんなそうです。



スライドに出ているのは、全国植樹祭跡地の苫東の「和みの森」です。ここは乳幼児や身障者も来られるような森ということで、コミュニティーフォレストリーというようなことをやっています。コープさっぽろの苫小牧店というのが、ノーレジ袋・北海道1号店ということで、苫小牧で何か活動をうまくやっているところということで、コープさっぽろさんから200

万円ほど寄付をいただきました。コーディネーターの次には、拠点といいますか、サロンみたいなものが必要だということで、苫小牧にたくさんある商業コンテナを改造させていただいて、施設を造っています。

コラボレーションの時代です。そんなことは言われるまでもないと思うのですが、僕は最近「工場型地域創造から劇場型へ」と思っていて、今までは協働で同じことをするというのが仲間だったと思うのです。協働で一つの作業をする。それはコーポレーションと言いますが、今は、ばらばらの人、全然違う人が結びついて一つの何かを作り上げていくことが大事だと思うのです。だから、工場でみんな働いて、「やあ、やあ」という時代から、劇場で劇を作るような、みんなばらばらな役回りなのだけれども、一つの創造をしていく。そこに欲求が行くと思うのです。苫東のこの森でも、なるべく多様な人を何とかまとめて新しいものを作っていくという森になると、いろんな人がかかわってくると思います。長々とお話ししました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（司 会）

宮本さん、どうもありがとうございます。ご来場の方はぜひ、宮本さんのお話の本があるので、よろしく願いいたします。

それでは、基調報告および基調講演、まことにありがとうございました。

ここで、休憩を取らせていただきます。その後に北川さんから、作品とお話ということで伺いたいと思っております。

（休 憩）

（司 会）

みなさん、「コンプバターあめ」のお話で盛り上がっているかと思えますけれども、時間ですので次のプログラムに進みたいと思います。

次は、映像クリエイターの北川陽稔さんによる特別プログラムになっております。勇払原野の映像を紹介していただこうと思っております。約40分の映像を流させていただいて、その後に北川さんからお話を伺うという予定でおります。

では早速、お願いいたします。



6. 特別プログラム

地球環境映画祭出品作品

「森と水の庭・ウトナイ川」上映とスピーチ

映像クリエイター 北川 陽稔氏

(約 40 分間の上映終了後)

今日は作品を見ていただき、どうもありがとうございました。

簡単にこの映像についての紹介をさせていただきたいと思います。元々、僕は札幌生まれ、札幌育ちで、19歳の頃から東京に行って、10年ほど映画や写真の仕事に取り組んでまいりました。その過程では海外の映画祭など、芸術系の活動が中心だったのですが、3年ほど前に諸事あって北海道に戻ってくることになりました。以前から何度も北海道と東京を行き来しながら新千歳空港を使っていましたので、空港周辺の景色というのが非常に気になっていました。とても興味深い風景だと思い、せっかく北海道に帰ってきたので、まずそこから何か自分の作品を作ってみたいと思ったのがそもそもの始まりです。最初は写真を撮り、60枚ぐらいから成る写真のシリーズを作りました。それは自分の元来の流れを踏襲したアート寄りの内容のものでしたが、いろんな方にその写真を見せて歩いている内に、この地域とかかわらせていただくようなきっかけを得ました。



映画の中にも出てきましたが、去年、この地域にある「イコロの森」さんなどの、写真や映像を撮影する仕事をやらせていただきました。その中で、もう一つ自分なりにやれることがないか。せっかく映像を作れるので、何か作品を作りたい。作品までいかななくても、何か一つ残せないだろうかと思って撮ったのが、この映像です。

写真の作品では通常、自分の意思だけでテーマを決めて取り組めますが、この映像作品に関しては自分の側からの発信ということを考えずに、この地域にどういう状況があって、北海道の未来を考えるに当たってどんなポジティブな要素があるのかを、自分の中で主眼に置いて制作させていただきました。おかげさまでこのように上映の機会をたくさん頂いて、あちこちで上映させていただいております。

自分自身が作家としてどういうことがやれるか、作品に取り組んでいく中で、最初は地域の自然環境や環境活動の紹介をしようというラフなスタンスで制作に入ったのですが、冒頭に出てくる丹治一二三さんの言葉の中で、森と水がいわば一つのネットワークになって地域の自然が守られている、という話を聞いて、とても深いことだと感じ、それが軸になって全体の構成ができ上がってゆきました。丹治さんからは生活のための森、その大切さがすごく伝わってきたのですが、さらに草苺さんのインタビューの中では、その次の次元として、僕たちの心身の癒しのための場としての森という次元が見えてきたと思いました。最終的に、そこからもっと先にある、人間の力とか意識が及ばない、とても深い次元にある森や水、自然というものが見えてきたように思います。

本作のような環境に関するドキュメンタリーに関しては、今回、長編を1本自分で作りましたが、現在、札幌の経専音楽放送芸術専門学校で専任講師として教えている関係もあり、先ほどの映画のようなものを学生たちに担ってもらえないだろうかと考えながら授業を進めています。今年度は試験的に、学生を実際に環境団体さんに紹介して映像を撮ってもらいました。

あるいは、映像の作り方というのは、基本を押さえればある程度は誰でもできるので、僕が実際に環境活動の現場に行ってレクチャーさせていただいて、後は現場の方々で活動を紹介するVTRを作

ってもらおうという活動も行っています。

今後いろいろな形で、北海道の環境というものを自分なりに考えて、社会的に受け入れられやすい次元であれ、あるいはアートとしての次元であれ、どちらからも自分なりに考えてやっていきたいと思っております。

今日は作品を見ていただき、どうもありがとうございました。（拍手）

（司 会）

今日は長い時間、皆様より基調報告、基調講演、そしてただいまの映像と、非常に盛りだくさんの内容を見せていただきました。私たちにとっても大変貴重なご提言とご示唆を頂いたと思っております。ここで、たくさんの意見交換をやりたいのですが、時間が押し迫っております。従いまして、ここで質問の時間を取らずに、このフォーラム終了後に個別にやり取りしていただきたいと思っております。

最後になりますが、本日のフォーラムの主催者の一員でございます、NPO法人苫東環境 commons の瀧澤理事から、フォーラムの閉会のご挨拶をさせていただきます。



（瀧澤）

皆様、長い方は11時からほとんど缶詰状態でずっと参加していただき、どうもありがとうございました。演者の皆様と参加して下さった皆様に、改めてお礼を申し上げます。

私たちは今日たくさんの啓発を頂きました。まだ、発足して9ヵ月目ですが、9ヵ月とは言いましても、私たち commons のスピリットは、何十年にもわたってここを見つめてきた、そして10年以上にわたって、ほとんどお一人で森づくりをされてきた草薙さんの精神に支えられております。草薙さんのように、私どももこれから地道に活動を続けていきたいと思っております。これまでと同様に、変わらぬご支援を賜りたいと思っております。どうもありがとうございました。（拍手）

7. 閉 会

（司 会）

それではこれで、第2回の環境フォーラムを閉会いたします。長時間にわたり、どうもありがとうございました。

なお、受付に北海道開発協会の出版物を展示しております。関心を持っておられる方、ぜひ本を手にとって見ていただいて、お持ち帰りいただければと思っております。

それから、恐縮ではございますけれども、ぜひこの場で、NPO法人苫東環境 commons への入会の勧誘をさせていただきたいと思っております。ご興味をお持ちの方、ぜひ当法人にご入会いただいて、苫東の森でさまざまな活動をしていただければと考えております。

では、本日は大変長い間、ありがとうございました。